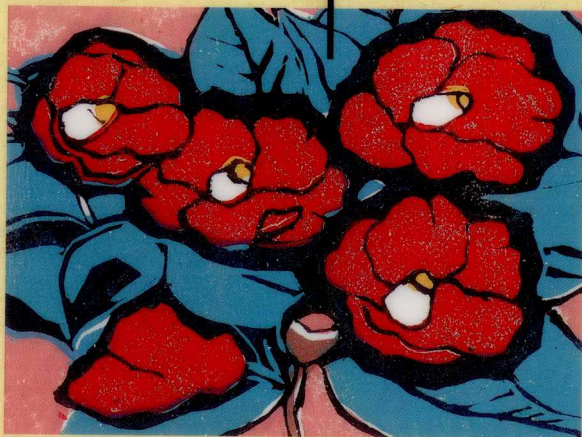


うたカミを行く

吉田悦男

— 心に残る詩と詩情をたずねて —



■著者略歴

吉田 悦男（よしだ えつお）

1938年、埼玉県生まれ。東京教育大（現・筑波大）文学部卒。

元・毎日新聞社編集委員。現・今週の日本編集部。

毎日新聞社社会部当時の長期連載「宗教を現代に問う」

（1975年9月～76年12月、グループ取材）で第24回菊池寛賞受賞。

著書＝「名古屋大空襲」（毎日新聞社刊）、「せんせい」（同）、

「宗教を現代に問う」（同、及び角川文庫）＝いずれも共著。

うたの里を行く

～心に残る詩と詩情をたずねて～

発行日 一九九六年七月十五日 第二版第一刷発行

著者 吉田悦男

発行者 土肥由夫

発行 株式会社 舵社

〒105 東京都港区浜松町1の2の17（ストークベル浜松町）

電話 03（3434）5181

ファックス 03（3434）2640

振替 東京00110・9・25521

インターネットURL [http:// www.pacwow.com/](http://www.pacwow.com/)

定価はカバーに表示してあります

不許無断複写複製

© 1996 by Etsuo Yosida printed in Japan

ISBN4-8072-6502-4 C0095

うたカミを行く

—心に残る詩と詩情をたずねて—

吉田悦男

うたの里を行く

城ヶ島の雨（北原白秋）	6	めえめえ児山羊（藤森秀夫）	32
證誠寺の狸ばやし（野口雨情）	8	雲（山村暮鳥）	34
美ヶ原熔岩台地（尾崎喜八）	10	帰郷（萩原朔太郎）	36
荒城の月（土井晩翠）	12	牧場の朝（杉村楚人冠）	38
てるてるぼうず（浅原六朗）	14	通りゃんせ（わらべうた）	40
赤とんぼ（三木露風）	16	早春賦（吉丸一昌）	42
樹下の二人（高村光太郎）	18	鳩ぼっぼ（東くめ）	44
浜千鳥（鹿島鳴秋）	20	故郷（高野辰之）	46
のちのおもひに（立原道造）	22	青い眼の人形（野口雨情）	48
夕焼小焼（中村雨紅）	24	靴が鳴る（清水かつら）	50
初恋（島崎藤村）	26	お猿のかごや（山上武夫）	52
砂山（北原白秋）	28	北の春（丸山 薫）	54
雪山讃歌（西堀栄二郎）	30	かなりや（西條八十）	56

どんぐりころころ (青木存義)	58
落葉松 (北原白秋)	60
花嫁人形 (落谷虹児)	62
鉄道唱歌 (大和田建樹)	64
旅愁 (天童球溪)	66
宵待草 (竹久夢二)	68
船頭小唄 (野口雨情)	70
からすの赤ちゃん (海沼 実)	72
月の砂漠 (加藤まさを)	74
若鷺の歌 (西條八十)	76
ひぐらし (山村暮鳥)	78
千曲川旅情のうた (島崎藤村)	80
うさぎとかめ (石原和三郎)	82
レモン哀歌 (高村光太郎)	84
汽車ポッポ (富原 薫)	86
ちいさい秋みつけた (サトウハチロー)	88
海の入日 (木下圭太郎)	90
おうま (林 柳波)	92

旅人かへらず (西脇順三郎)	94
さくら貝の歌 (土屋花情)	96
素朴な琴 (八木重吉)	98
里の秋 (斎藤信夫)	100
金峯山の思ひ出 (尾崎喜八)	102
とんがり帽子 (菊田一夫)	104
北上夜曲 (菊地 規)	106
めだかの学校 (芥木 滋)	108
落葉 (平井晩村)	110
出船 (勝田香月)	112
雲の如く (小川未明)	114
七里ヶ浜の哀歌 (三角錫子)	116
雨降りお月 (野口雨情)	118
汽車 (作詞者不詳)	120
カチューシャの唄 (島村抱月・相馬御風)	122
ある時 (山村暮鳥)	124
たきび (巽 聖歌)	126
旅の夜風 (西條八十)	128

春よ来い (相馬御風)	130
海水旅館 (萩原朔太郎)	132
箱根八里 (鳥居 忱)	134
山麓の二人 (高村光太郎)	136
花 (武島羽衣)	138
花かげ (大村主計)	140
朧月夜 (高野辰之)	142
風のごとし (中 勘助)	144
御所平 (尾崎喜八)	146
広瀬川 (土井晚翠)	148
背くらべ (海野 厚)	150
漂泊 (伊良子清白)	152
椰子の実 (島崎藤村)	154
川越舟唄 (作者不詳)	156
きんたろう (石原和三郎)	158
みかんの花咲く丘 (加藤省吾)	160
夏は来ぬ (佐佐木信綱)	162
琵琶湖周航の歌 (小口太郎)	164

ふるさとの (三木露風)	166
夕日 (葛原しげる)	168
帰郷 (中原中也)	170
枯野の旅 (若山牧水)	172
春の小川 (高野辰之)	174
波浮の港 (野口雨情)	176
鈴懸の径 (佐伯孝夫)	178
リングの唄 (サトウハチロー)	180
草枕 (島崎藤村)	182
湖畔の宿 (佐藤惣之助)	184
湯島の白梅 (佐伯孝夫)	186
山林に自由存す (国木田独步)	188
あとがき	190

城ヶ島の雨（北原白秋）

神奈川県三浦市

三浦半島突端・三崎の昼下がり。薄い雲が少しずつ切れ、のぞく日差しに海が光る。時刻のせい、船の出入りも、人の動きもまばらだ。

城ヶ島の西端の灯台下まで行くバスを海岸通りで降り、歩いて城ヶ島大橋を渡る。目と鼻の先に、平べったい島が横たわる。

島側の橋のたもとには、白秋碑苑という小公園。「城ヶ島の雨」の詩碑と、白秋記念館が建つ。

碑は、高さ三メートルほどの、舟の帆の形をした根府川石。表面に詩の第一節が、白秋自筆の草書体で刻まれている。「帆形の石を荒磯に突き刺したように」というのが、白秋の要望だったそうだ。

碑が出来たのは一九四九年。大橋の建設（一九六〇年）で約五十メートル西の現在地に移され、碑面も西向きになった。元のままだと橋げたとにらめっこになってしまっただが、古い白秋ファンは不満らしい。

記念館は、こぢんまりした二階建て。ゆかりの写真や文書のほかに、利休鼠（きゆうね）の解説コーナーがある。少し緑がかった灰色のカラー見本つき。「千利休の茶に由来するそうですけど、さすが詩人の表現は違いますね」と、窓口の松井あや子さん（六二）。

今年（一九九三）一月のNHKテレビ・芸術劇場「エルンスト・ヘフリガー（ドイツのテノール歌手）日本歌曲を歌う」での利休鼠は、Grauen Regendunst（灰色の霧雨）だった。日本語の奥は深い。

城ヶ島は、周囲六キロ余り。二時間もあれば歩いて一周できる。バスターミナル付近は土産物店が並び、観光客に下物を勧める声にぎやかだった。

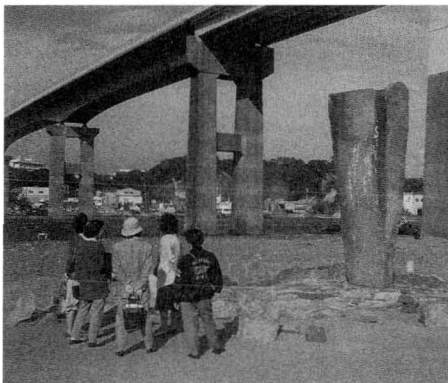
雨はふるふる、城ヶ島の磯に、
利休鼠の雨が降る ……

一九一三年の作。五月ごろ芸術座から舟歌の詩として依頼され、十月の発表日三日前に届けられた。歌手が間にあわず、音楽会では作曲者の梁田貞自身^{あきみ}が歌った。

当時の白秋は、実家（福岡・柳川）海産物問屋が破産、一家で三崎での魚の仲買いを始めたものの失敗、妻と二人だけで三崎に残っていた。

十一月二日は白秋忌。以前はこの日、詩碑の前でしのぶ集い（碑前祭）が行われた（現在は詩碑除幕日の七月十日）。

【周】城ヶ島観光協会（0468・82・2160）



詩碑のあたりには中年女性の姿が目立つ

證誠寺の狸ばやし（野口雨情）

千葉県木更津市

十月下旬の土曜日。月夜ならぬ、秋晴れの午後の證誠寺は、千客万来だった。年に一度の「狸まつり」。地元婦人会のバザーや甘酒サービスに人だかりが出来ている。

内房線木更津駅から歩いて七、八分。大通りを少し離れた矢那川べりに、證誠寺（浄土真宗）はある。寛文年間（江戸初期）創建というから、ざっと三百二十、三十年の歴史を持つ。敷地（約六六〇〇平方メートル）の三分の一は植え込み。構えたところのない、気おけない寺だ。

境内の隅に一九五六年、童謡「證誠寺の狸ばやし」の石碑が建ったのに合わせ、たけなわの秋の一日、幻のタヌキたちと歌の作者を供養する。

本堂正面に、雨情と作曲者・中山晋平の写真。両わきに大小三十個余りのタヌキの置物。住職の法話、琴の演奏、木更津甚句の踊り……と進んで、トリは木更津第一小の二、六年女子二十四人による狸ばやしのダンス。タヌキと小坊主の衣装をまとった楽しいショーにはアンコールの声が続ぎ、子供たちは二度踊るはめになった。

「昔からの形に、バレエの要素を加えた振り付けにしました」と、指導の香取瑞枝教諭（五〇）。今や同校の名物だそうで、この夏には長野県での信州博覧会にも出演したという。

「今日は特別ですが、ふだんでもかなり遠方からおいでになる方もありまして」と、隆克朗住職（六二）。「それほどまでに、歌が親しまれているということなんですよ」

境内の掲示板に、墨黒々と住職自筆の文書が一枚。「たぬきは化けません。化けるのは人間だけです」

境内には本物のタヌキが二匹飼われている。祭りに浮かれてか、人出に驚いてか、終日、動作がせわしなかつた。

證、證、證誠寺、證誠寺の庭は……

一九二四年、野口雨情の作。元は、證誠寺に伝わる民話。名月の夜、タヌキが勢ぞろいして踊るのに、和尚さんがつり込まれて三晩競演。四日目の夜にタヌキたちが来ないので見ると、腹の裂けた大タヌキが死んでいた、という話。

当時の君津郡教育会の招きで講演に來た雨情が詩にして雑誌「金の星」に発表、中山晋平の曲で全国に広まった。

【図】證誠寺（04388・22・2018）



本堂も、この日は歌と踊りのステージに

美ヶ原熔岩台地（尾崎喜八）

長野県武石、和田村

草原を西風が吹き抜けていた。薄着の観光客が首をすくめて歩く。雲の流れが切れ目なく、自慢の北アルプスの眺望はまるで利かない。

美ヶ原高原は、約六百ヘクタールものゆるやかな台地だ。平均標高二〇〇〇メートル。数字だけなら谷川岳より高いのだが、ここへの道路が整い、年間二百余万人が歩かずに登ってくる。

高原の東の端に、山本小屋がある。現在はレストハウスと売店営業が主。玄関先の広い駐車場は、地元や東海、関東ナンバーの車数十台で埋まっていた。

美ヶ原の歴史、イコール山本小屋の歴史だ。ふもとの依田村（現・丸子町）の山本俊一さん（故人）が独力でルートを開き、笹ぶきの小屋を建てたのが一九三〇年。四男の峻秀さんが引き継いで半世紀。一九六二年に少し西に別の小屋（美ヶ原高原ホテル）を建て、一年のほとんどをそこで暮らす。

峻秀さんは七十三歳だが、山とスキーで鍛えた体は十歳は若いと、だれもが言う。「調和ある開発というのは、口で言うほど簡単じゃない。でも、おやじの道を歩き通してよかったと思います」と、ホテルの自室で峻秀さん。一部の山男だけでなく、万人に自然賛歌を、というのが俊一さんの信念だった。

ホテルから五分も歩けば、高原のシンボル・美しの塔。高さ約六メートルの石造りのモニュメ

ントだ。南面に、尾崎喜八の詩「美ガ原熔岩台地」の全文、北面には、俊二さんのレリーフ。若いカップルや熟年ハイカーたちが入れ替わり、写真を撮り合っていた。

登りついて不意にひらけた眼前の風景に
しばらくは世界の天井が抜けたかと思う
……

美しの塔。濃霧の時は天井の鐘が場所を知らせる



詩集「高原詩抄」(一九四二年、青木書店刊)の作品の一つ。美しの塔に刻まれているのは片仮名書き。

山の詩人とも言われる尾崎喜八は、昭和中期に何度か美ヶ原を訪れた。峻秀さんは、その著書「美ヶ原讃歌」(実業之日本社刊)の中で「尾崎さんの遺していかれた詩文集を開くと、そこから自然讃歌の交響楽を聴く思いがする」と書いている。

【周】美ヶ原高原ホテル(0268・86・2011)

荒城の月（土井晩翠）

福島県会津若松市

磐越西線の列車が会津若松駅に近づくころから、雲行きが怪しくなった。前線通過の予報が当たったらしい。タクシーで鶴ヶ城へ。フロントガラスに時々、小粒の雨がぶつかる。

日本の歴史の、大きな節目の一つ、戊辰戦争の舞台になった鶴ヶ城。一九六五年に五層の天守閣が再建され、郷土博物館として生まれ変わった。

行楽期をはずれた、不順な空模様の日なのに、駐車場は大型バスやマイカーであふれ、城内も場所によっては行列が出来ている。名にしおう名所だけのことはある。

城跡の東南角、月見櫓の石垣のそばに、「荒城の月」の詩碑がある。いくつもの自然石を高さ二メートル、幅四メートルほどに組んだ中に、詩の全文を刻んだ畳一枚くらいの碑面がはめ込まれている。

裏側に、一九四七年六月五日付の、詩碑建立に寄せての晩翠のメッセージ。「第二高等学校生徒時代、鶴ヶ城を訪ひ来て、胸裡深く印象を残した。其後、鶴ヶ城及び仙台青葉城等を詩材として荒城の月の歌詞成り、短命の天才滝廉太郎君の名曲を得てよりこのかた五十年近い。（中略）往時を思ひ現代を眺めて感慨無量である」

鶴ヶ城は戊辰戦争後、一八七四年に解体された。一八七一年生まれの晩翠の旧制高校時代といえ、国破れて山河あり、の趣そのままの、石垣だけを残す荒れた城跡だったに違いない。

碑のあたりにいた小一時間に、そこにやって来た人は、十人足らず。振り返って見上げる天守閣の展望台は、人の切れ目がなかった。

春高樓の花の宴 めぐる盃影さして

……

一八九八年、東京音楽学校から中等唱歌集の編集のために依頼されて作詞、滝廉太郎の曲がついて不朽の名作となった。

詩のイメージの多くは、鶴ヶ城と、故郷・仙台の青葉城から。晩翠自身が語ったところによると、主として鶴ヶ城跡の印象が強く、「垣に残るはただかづら、松に歌ふはただあらし」の詩句だけは青葉城跡から得たという。

廉太郎の曲想の中にあっただのは、少年期を過ごした大分県竹田市の岡城跡。それぞれに詩（歌）碑がある。

【岡】会津若松市役所観光課（0242・28・1111）



左手、桜の根本に詩碑がある。右奥は鶴ヶ城

てるてるぼうず（浅原六朗）

長野県池田町

晩秋の安曇野^{あづみの}。切り株だけが残る田んぼ。枯れ葉と緑をないまぜた林。遠くの北アルプスのりよう線はすでに白い。

大糸線・信濃松川からタクシーで五、六分。アルプスの水を集めた高瀬川を渡ると、池田町。

家並みを少しはずれた、町役場の隣に浅原六朗文学記念館がある。別名・てるてるぼうずの館。鉄筋コンクリート二階建て、延べ約二五〇平方メートルのこぢんまりした造り。

スリッパにはき替えて館内へ。天窓から差し込むやわらかな光を受けて、自筆の書や写真、著書などが、ほどこいスペースで置かれている。外からはわからなかったが、建物はからかさをかたどって柱と梁^{はり}が組まれている。採光と合わせて、てるてるぼうずの詩情を表現しているのだと、管理責任者の中野幸子さん（同町教育委員会）は言った。

六朗の生家は今はなく、三人の子供も県外。町で唯一しのぶ場所が記念館だが、年間来館者は四千人ほど。「地味な施設ですから。浅原六朗といっても一般には無名の人でしょうし、ここへおいでになって初めて、ああ、あの歌の、と驚く方もいらっしゃるんですよ」（中野さん）

自然美以外に、これぞ池田の看板のない町の、キャッチフレーズの一つが「てるてるぼうずの作者の出身地」。毎日午前六時、正午、午後五時の三回、役場の屋上から、チャイムの「てるてるぼうず」が流れる。

六朗は一九六四年春、池田小学校の校歌を作詞している。三番から成る歌の冒頭は「北アルプスの空のもと、みんなすすくすのびている……」。全体にどこことなく童謡的だ。言葉だけでなく、書体に丸みがあつてやわらかく、文字のファンも多いという。

てるてるぼうず てるぼうず
あした天気にしておくれ ……

一九二二年、編集者をしていた雑誌「少女の友」に鏡村のペンネームで発表。当初は四番まであったが、二年后、中山晋平の曲で楽譜出版された時は一番を削除、三番最後の「そなたの首をチョンと切らう（ろう）」が「切るぞ」になった。

幻の一番は次の通り。「てるてるぼうず てるぼうず、あした天気にしておくれ もしも曇ってないたら 空をながめてみんななかう（泣こう）」

【周】浅原六朗文学記念館（0261・62・6666）



記念館内部。天井に大きな鈴がついている